



赤漆器水差し形容器と未製品の出土状態（新潟県御井戸遺跡）

## かわはく No.23

### CONTENTS

特別展「蘇る縄文～自然と暮らした人々～」	2
常設展示ガイドツアー・音声ガイドの提供について	4
かわはくの展示から「荒川水系の祭りと行事」	4
「かわはく植物マップ」を作成しました	5
大盛況！「南極の氷をみる・きく・さわる」	6
平成16年度アンケート調査及び来館者統計から	7
かわはくで学ぼう	8

## 8月

7/16日(土)～9/19(月) 特別展「蘇る縄文～自然と暮らし  
た人々～」

1日(月) 水の日記念イベント「利き水大会」

時間：10:30～13:30～

7日(日) 特別展開連事業 縄文体験！狩りに挑戦

内容：弓矢の製作実験

時間：10:30～13:30～ 費用：200円

定員：各40人(申込順) ☎

10日(水)17日(水) 利用促進研修会

定員：32人(申込順)

内容：小中学校の教員を対象とした体験研修

18日(木) 教員のための環境学習講座

(立正大学・総合教育センター共催)

時間：9:30～16:00 場所：ティアラ21(熊谷駅ビル) ☎

定員：30人

20(土)かわはく夏祭り

内容：子ども向け各種イベント 時間：10:00～19:30

21(日) 荒川いかだ下り2005(荒川いかだ下り実行委員会主催)

内容：創作いかだで寄居町内の荒川を下る

時間：9:00～15:00

23日(火) 子ども体験スクール(自然史博物館との連携事業)

「川原の石しらべ」

時間：13:00～15:00 定員：32人 費用：保険料100円 ☎

## 9月

10日(土) サタデーミュージアム「川原の昆虫観察」

時間：10:30～12:00 14:00～15:30 定員：32人

費用：無料 ☎

18日(日) 映画会「人魚と海賊船」(23分)

時間：13:30～14:30～ 定員：80人

9月より映画会では、毎回「どうぶつ村のワールドカップ  
～よい子のこうつうあんぜん～」(11分)を上映します

24日(土) サタデーミュージアム「手づくり箱メガネで  
川底を観察しよう」

時間：10:30～12:00 14:00～15:30 定員：32人 費用：無料☎



わくわくサタデーミュージアム昆虫観察

# かわはくで学ぼう!!

## イベント情報コーナー

## 10月

10/22日(土)～11/27(日)

テーマ展「洪水の記憶」

1日(土) サタデーミュージアム「秋の押し花カードをつくろう」

時間：10:30～12:00 14:00～15:30 定員：32人 費用：100円☎

2日(日) 野外教室「荒川を歩く」

内容：荒川の旧河道や水子貝塚などの見学

時間：9:30～15:30 定員：50人(申込順) 費用：100円(保険料)

8(日) サタデーサポート講座「総合的な学習の時間スキルアップ研修」

(総合教育センター共催)

時間：9:30～12:00 対象：公立小学校教員

9(日) 映画会「地球SOSそれゆけコロリン」(34分)

時間：13:30～14:30～ 定員：80人

15(土) サタデーミュージアム「草木染めでハンカチづくり」

時間：10:30～12:00 14:00～15:30 定員：32人 費用：200円☎

16日(日) 荒川ゼミナール「荒川水運と物資輸送」

講師：丹治 健蔵 氏

(交通史研究会顧問)

時間：13:30～

定員：80人(申込順)

費用：無料 ☎



## 11月

2日(水) 野外教室「荒川バスツアー」(自然史博物館連携事業)

内容：中津川や日室鉱山の見学

時間：8:30～16:30 集合：寄居駅北口

定員：25人(申込順) 費用：1500円 ☎

5日(土) サタデーミュージアム「不思議な船をつくろう」

時間：10:30～12:00 14:00～15:30 定員：32人 費用：100円☎

14日(月) 県民の日イベント(無料開放)

時間：10:00～16:00

内容：各種子ども向けイベント

19日(土) サタデーミュージアム「ポンポン蒸気船をつくろう」

時間：10:30～12:00 14:00～15:30 定員：32人 費用：200円☎

20日(日) 荒川ゼミナール「荒川の河岸」(仮称)

講師：黒須 茂氏(元県立博物館長)

時間：13:30～ 定員：80人 費用：無料 ☎

27日(日) 映画会「源吉じいさんと子ぎつね」(18分)

時間：13:30～14:30～ 定員：80人



原則として毎月第2・4土曜日(10月以降は第1・3土曜日)10:30～と14:30～は「わくわくサタデーミュージアム」・  
毎月1回(土曜日または日曜日)13:30～は「映画会」が開かれます。最新の情報はかわはく情報等で紹介されます。

ホームページでも紹介しています!

<http://www.river-museum.jp/>

【お願い】 行事は都合により変更になることもあります。ご了承下さい。 ☎印のついた行事は事前申込みが必要です。電話またはFAX  
でお申し込みください。 定員になりしだい締め切ります。 川の情報もお寄せ下さい。

編集・発行

さいたま川の博物館

TEL 048-581-8739(学芸) / FAX 048-581-7332

〒369-1217 埼玉県大里郡寄居町大字小園3 9 番地



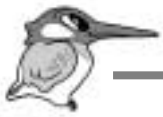
彩の国さいたま

2005年7月15日発行

R100



環境負荷低減100%再生紙を使用しています



平成17年度特別展

よみがえ

## 蘇る縄文～自然と暮らした人々～

開催期間 7月16日（土）～9月19日（月）

縄文時代と言うと、古く停滞的なイメージがつきまとっているに違いありません。しかし、縄文時代には土器や石器以外にも、皿やお盆、水差しなどの木製品があり、竹や樹皮を素材としたカゴや容器なども作られていました。それらの生活用具は、赤や黒の漆で美しく飾り立てられており、特に髪飾りや腕輪、耳飾りなどの装飾品には過剰なまでの装飾が施されていたのです。

今回の展示では、主に水辺に残された遺跡で奇跡的に保存された縄文時代の生活用具を通して、自然との見事な共生を果たしていた人々の暮らしぶりにも触れていただきます。来館された皆さんが、我々の遠い祖先である縄文人の自然に対する豊かな知識と様々な技に対してご理解いただければ幸いです。

### 縄文土器の世界

縄文土器とはその名のとおり縄目の付いた土器ですが、それ以外にも実に様々な文様で土器面が飾られていました。その中には装飾的なものではなく、明らかに呪術的な意味を持ったと思われる文様があります。その代表が縄文時代の中期（5,000年前）中部地方を中心に見られるヘビや人面の文様の付いた土器です。土器に施された不思議な文様を通して、縄文人のマジカルな世界に触れてみてください。

### 艶やかな縄文の器

黒い素焼きの土器が、多くの人々が持っている縄文土器のイメージでしょう。しかし、土器の中には赤や黒の漆で見事な彩色が施された例がたくさんあります。とりわけ縄文人は、赤という色彩に強い思い入れを持っていたようで、土器ばかりか土偶までも赤漆が塗られています。日常用具である土器を飾り立て、生活の中に潤いを持たせていた縄文人の豊かな心に思いを馳せてください。



縄文土器の至宝：水煙土器（長野県曾利遺跡）



ヘビ装飾付土器（山梨県甲ツ原遺跡）



彩色土器（群馬県高崎情報団地 遺跡）



## 縄文人の意外

縄文人も自らを美しく飾る為に、漆塗の美しい耳飾りは無論、翡翠や琥珀を用いた胸飾りを持っていました。貝や動物の骨や牙など、様々な自然の素材を用いて、創造性豊かな装身具で身を飾っていたのです。

自給自足が基本とはいえ、翡翠や琥珀、そして黒曜石が産地を離れて広範囲に分布していることから、当時、既に物資の取引が行われていたことが解ります。特に石器製作に欠かすことのできない黒曜石は、地中を数メートルも掘り下げて採掘まで行っていました。

## 縄文の豊かな生活

意外にも縄文人の主食は、クリやクルミ、トチなどの木の実、山菜、山イモやユリなどの植物性の食糧でした。これに動物や魚などを組み合わせることで、安定した食生活を送っていました。自然の素材を基に、クッキーやハンバーグなどの加工食品を作り、そして食していたのです。

自然の豊かな恵みに支えられた生活を送る縄文人には、森や川からの恵みが安定的に続くことが最大の願望であったようです。土偶や石棒を始めとした不思議な道具の数々は、自然に対する畏敬の念と変わらぬ感謝の気持ちを表現したものかも知れません。

## 縄文の木工技術

縄文文化とは、ある意味で「木の文化」でした。自然に対する深い知識に基づき、家を作る場合はクリ、容器はトチ、朴、弓にはイヌガヤなどと、使用する目的に合った木を選択して道具作りを行っていました。石の道具だけで厚さ数ミリの見事な木製容器を作った縄文人の技、さらにその容器を赤や黒の漆で美しく仕上げた美意識には、感動すら覚えます。

木材だけではなく、植物の利用も盛んで、縄文人は樹皮や竹、植物の繊維を用いて、各種のカゴやザルを作っていました。民俗資料のような出来映えのカゴやザルを前に、改めて自然の中に暮らした人々の工夫とたくましさを感じてください。

(展示担当 栗島義明)



翡翠・琥珀の大珠(神奈川県東開戸遺跡)



ハンバーグ(長野県曾利遺跡)



カゴに入った木の実(神奈川県羽根尾貝塚)



黒漆塗容器(新潟県分谷地A遺跡)



## ～ 御参加をお待ちしています ～

### 常設展示ガイドツアー・音声ガイドの提供について

当館の常設展示は、「荒川と人々の暮らしとの関わり」をテーマにしています。楽しみながら学べる参加体験型展示として、ご来館されたの多くの方々に好評を得ています。

今年度から、ご来館された方々に荒川のことや展示について、より深く理解を深めていただくために「常設展示ガイドツアー」と「音声ガイド」の提供を始めました。

「常設展示ガイドツアー」は、荒川の自然や歴史、常設展示資料などについて、11名の学芸職員が専門的な立場から、分かりやすく解説いたします。開催日時は、次のとおりです。ご来館の時には、ぜひご参加ください。

開催日時：4～9月 第1・3土曜日、  
10～11月・3月 第2・4土曜日、  
午後1時40分～（20分～約1時間程度）

「音声ガイド」は、視覚障害者や展示内容をより詳しくお知りになりたい方々にお貸しする小型のヘッドホンタイプのプレーヤーです。常設展示室内の30ポイントで、各展示資料の詳しい解説がお聞きになれます。貸し出しをご希望の方は、総合案内にお申し出ください。

（展示担当 今井 宏）



### かわはくの展示から

## 荒川水系の祭り と 行事

第一展示室の2階から1階に向かって階段を利用して下りてくると、右側の展示ケースの中にジオラマとバックパネルで構成された「荒川水系の祭り と 行事」という展示コーナーがあります。このコーナーは、一年のうちに5回展示替えが行われます。

平成17年7月初め現在で、取り上げられているテーマは、『吉見町飯島新田の洪水除け行事』です。だいたい一つのテーマが継続されている期間は2～3ヶ月ですが、展示構成としては、どのテーマも同じで、ケースの前側に行事の一場面を表現した簡単なジオラマがあり、背面に写真や同様の行事の県内分布図からできているパネルがあります。

他のテーマとしては、『小川町能増の流れ灌頂』『皆野町下日野沢の人形流し』『秩父市三峯の若水汲み』『小鹿野町河原沢のオヒナゲエ』『小川町大塚の川施餓鬼』『荒川流域の水口祭り』『秩父市鶉平のフセギ』『秩父市沢口の精霊送り』があります。

この展示コーナーが設けられた目的は、荒川流域に川や水に関連した多種多様な祭りや行事が伝承されていて、それらの代表的な事例を紹介することによって、川に親しみを感じてもらうとともに、水の持っている怖さ・恐ろしさにも気づいてもらうというところにあります。

生活様式の急激な変化によって、これらの行事は失われつつあります。

（展示担当 針谷浩一）



左の写真は、平成10年度に展示したときの状況ですが、実際の行事は毎年7月25日に、堤防が完成して洪水の危険が無くなった現在でも行われています。



# 「かわはく植物マップ」を作成しました

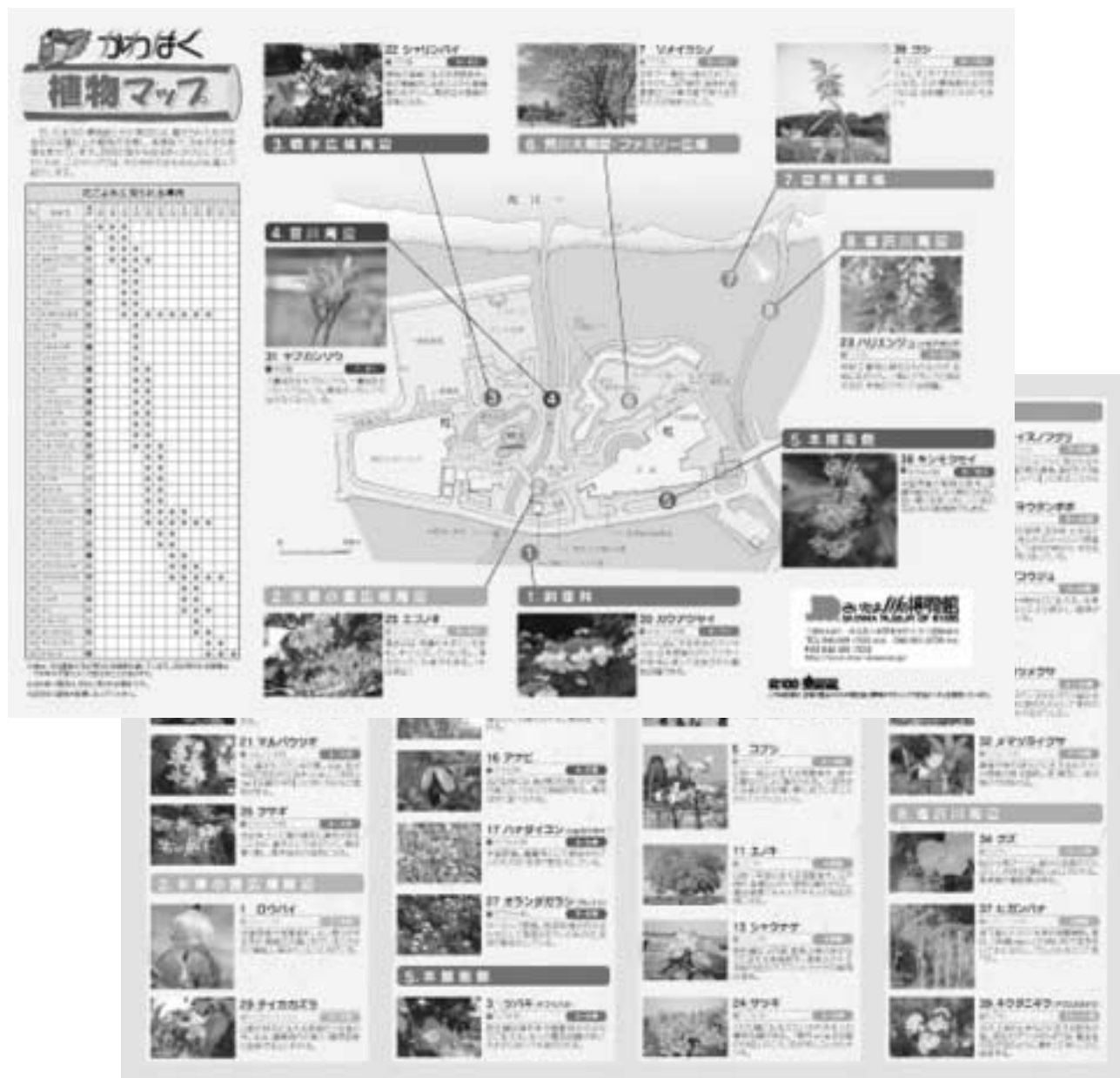
私たちの身の周りには、その地域の環境に適応し自生する植物や植栽された植物などさまざまな植物が生育しています。とりわけ、自生する植物の分布と川とのかかわりはたいへん深いものがあります。さいたま川の博物館とその周辺には、植栽されたものを含め200種以上の植物が生育し、四季折々さまざまな表情を見せてくれます。みなさんに、自然の営みや自然と人間とのつながりの一端を知っていただくため、その中から40種を選んで、カラー写真とコメントで紹介した「かわはく植物マップ」を作成しました。希望される方には無料でさしあげておりますのでご連絡下さい。

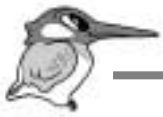
規格はA3版両面カラー印刷です。

さいたま川の博物館とその周辺を8つのゾーンに分け、どこで、いつ頃どんな花が見られるのか、表や図を使ってわかりやすく解説しています。

川の博物館の植物を使った参加体験プログラムを検討しています。

(教育普及担当 寺尾好夫)





## ～大盛況！「南極の氷をみる・きく・さわる」～

南極大陸は、かつての超大陸ゴンドワナ大陸が分裂してできました。ジュラ紀までは現在のアフリカ大陸、南アメリカ大陸、インド亜大陸、オーストラリア大陸と地続きでしたが、5000万年前頃に完全に孤立した大陸になりました。面積は1360万km<sup>2</sup>で、これは、地球上の陸地の10分の1にあたり、日本の約37倍になります。大陸の95%以上が氷床と呼ばれる、厚さ1859mほどの氷におおわれています。

南極の氷は水がそのまま凍ったのではなく、降り積もった雪が凍ったものです。氷の中には、冷え固まるときに雪のまわりにあった大気が、気泡として含まれています。大陸中央部の最下部では100万年以上前の氷が残っており、それに含まれる大気を分析することにより過去の地球環境を再現できます。また、地球の大気は南極に集まるため、地球全体の環境汚染を科学的に判断できます。この他にも様々な科学的な情報が得られるため、南極大陸各地に科学観測のための基地が設置され地球環境や天体の観測を行っています。日本は1957年、東オングル島に昭和基地を設置しました。現在までの約半世紀間、計46回にわたり南極観測隊を派遣し、極寒地の自然現象を探り続け、南極隕石やオゾンホールが発見、過去の地球環境の解明等、多くの成果を得ています。この南極観測隊による観測を支え、協力しているのが海上自衛隊砕氷艦「しらせ」とその乗員です。

今回、地元寄居町出身で、「しらせ」航海科に所属する佐久間沢樹氏に南極の写真と、氷の提供及び、講演をしていただき、「南極の氷をみる・きく・さわる」写真展を4月9日（土）～5月8日（日）講演会、氷の展示を5月8日（日）に開催しました。

写真展では、オーロラや棚氷（写真1）など南極の自然の様子をおさめた写真の他、「しらせ」乗員が南極到着後に行う作業の様子や暴風圏航海の様子など、39点を展示しました。また、南極の



写真1 アメリー棚氷（佐久間沢樹氏提供）



写真2 南極の氷をさわる子どもたち

氷の展示では、氷の中に含まれる大気のはじける「ピチピチ」といった音とともに、手で氷を解かしたときに大気のはじける感触を多くの方が楽しみました。（写真2）講演会では、4月に2回目の南極渡航を終え、帰国したばかりの佐久間氏の貴重な体験を多くの映像を交えてお話しして頂きました。定員を上回る98人の方に参加して頂き、参加して頂いた方から、

ペンギンやアザラシがかわいくて楽しかったです。南極の氷も冷たくてもう一回さわりたいです。（小学校3年生）

南極のいろいろなことがわかった。僕も南極へ行っていろいろなことを調べてみたいです。（中学校1年生）

自分にとって未知の世界の経験を聞ける機会が地元であったことに感謝します。興奮しました。（保護者）

等の感想をいただくなど、大変好評でした。

（教育普及担当 関根光男）



# 平成16年度アンケート調査及び来館者統計から

来館者やインターネットにより565人の方から回答を得ました。当館の特色を示す統計資料とも合わせて紹介します。

G1では県外としては群馬県の来館者が多いのが特徴になっています。群馬県内小学校の各学級に案内資料を配付しましたが交通事情から来やすいこと、川や水について学ぶ類似施設が近隣にはないことなどが理由と思われる。

G2からG6までは毎年ほぼ同じ傾向を示しています。30・40歳代の親とその子どもという家族連れが多いのが当館の特色です。

交通手段は車利用がほとんどです。電車利用はかなり低くなっています。当館を知った方法は相変わらず「彩の国だより」が高率です。その他は具体的な記載が少ないのですが、道路標示や集客施設各所に置いたパンフ、ミニコミ紙などがありました。

G7の印象に残った施設はインターネット調査によるものです。映像に合わせて座席が揺れるアドベンチャーシアターのスリルと、直径23mの木製大水車が回転するダイナミックさ、参加体験型

の展示などが他にはないものとして印象に残ったのではないかと思います。

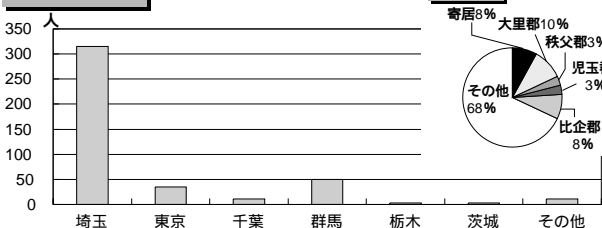
G8は荒川の流域に棲む魚類などを展示している「溪流観察窓」の観覧者と総入館者との比較です。案内看板設置などインフォメーション機能を充実したことにより観覧者割合が増えました。屋外の無料ゾーンにあるので観覧しやすいことも大きな要因と考えています。

G9は当館の特色をよく表しており、冬期と夏期の差が大きいことが分かります。5・10・11月は学校団体による利用が主体です。冬期集客は大きな課題ですが、他機関との連携による展覧会などを開催し来館者を確保しています。今後さらに工夫していきたいと思ひます

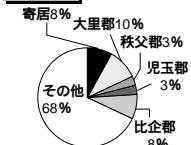
埼玉県民は700万人を超えました。さいたま川の博物館を知らない、行ったことがない人はまだまだたくさんいます。知ってもらふ、来てもらうための広報の強化をさらに進めています。

(副館長 小久保 徹)

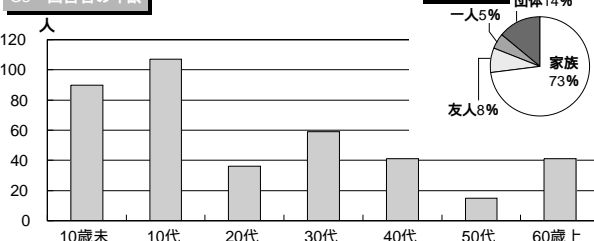
G1 回答者の住所



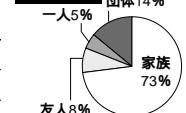
G2 県内



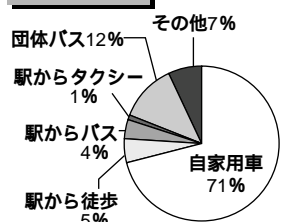
G3 回答者の年齢



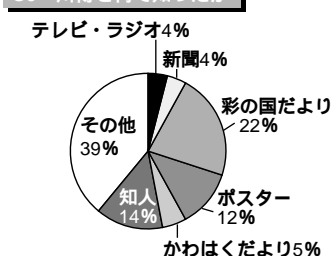
G4 同行者



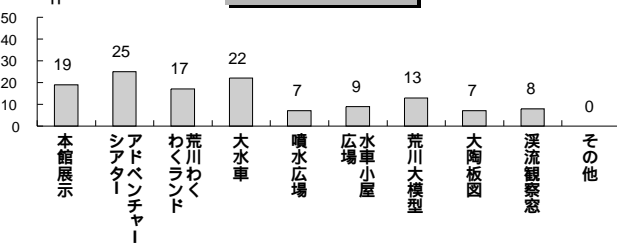
G5 交通手段



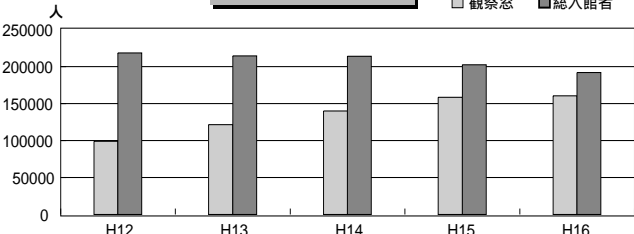
G6 川博を何で知ったか



G7 印象に残った施設



G8 溪流観察窓入場者比較



G9 月別総入館者数

